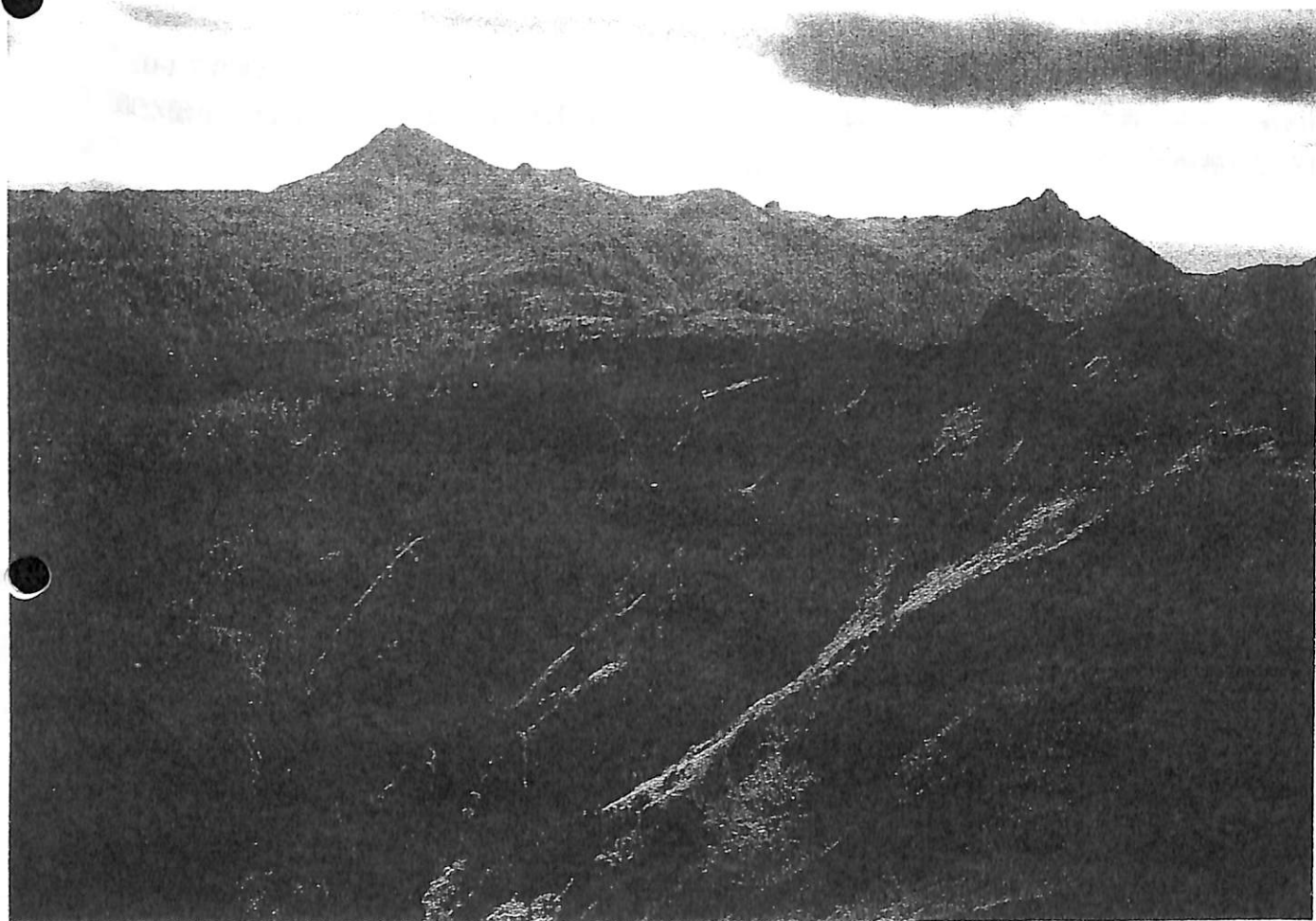


北の自然

北海道自然保護連合通信

NO.88

2014 9.25



芦別岳から夕張岳を望む

巨大風車群から奇跡の砂浜海岸・銭函海岸を守る

銭函海岸の自然を守る会 代表 後藤 言行

1. 発端

私たちが風力発電計画を“正式に”知らされたのは、2009年5月の小樽市長による定例記者会見である。市長の見解は「社会的意義は大きい。早期実現を期待」というものであった。私たちは銭函海岸で行われていた小樽市総合博物館の生物相の調査活動にボランティアとして参加していた。

「この砂丘が破壊される！」まず感じた率直な感想である。

ほどなく「環境影響評価方法書(案)」の縦覧が始まる。縦覧場所は市役所・企画政策室(小樽市制の中枢部分であるらしい)。「コピー禁止」「写真撮影禁止」など、なるべく一般市民の目に触れさせないようにと腐心しているのがありありと分かるやり方で縦覧がされた。配達証明付きで方法書の提供を二度要求したが、完全に無視される。そして縦覧が終わった翌日に、事業者(日本風力開発(株)、以後JWDと記す)は「自然愛好者に限る」という一方的な条件付きで説明会を行った。

一方、私たちは説明会の半月ほど前に「銭函海岸の自然を守る会」を立ち上げていた(2009.7.14)。銭函海岸が本当に貴重なものであるならば、そして必ず守らなければならない自然ならば、半端な取り組みでは破壊から守ることはできないと考えたからである。

2. 奇跡の砂浜海岸・オタネ浜

銭函海岸は190万都市札幌に隣接し、石狩市、小樽市に囲まれた地域である。200万人を超える人口に囲まれた地域でありながら石狩市から小樽市へとつながる25kmにも及ぶ日本一のカシワ自然林(残念ながら石狩湾新港で分断されてしまったが)を後背林に持つ砂浜海岸である。現在、日本の海岸で“開発”の波に飲み込まれずに比較的原始的な姿をとどめている海岸はきわめて少ない。砂浜海岸に至ってはほとんどないに等しいのではなからうか。そんな中で、石狩湾新港～新川河口に至る約5kmの通称“オタネ浜”は、まさに奇跡の砂浜海岸と呼ぶのにふさわしい海岸である。

スーパーコロニーで有名なエゾアカヤマアリ、下北とカシワ林内の融雪池でしか知られていないキタハウネンエビをはじめ“希少”と表現される動・植物もたくさんあるが「希少だから」保護しなければならないのではなく、この生態系全体を次世代への遺産として引き継ぐことが私たちの責務だと思う。

3. 風車建設計画と事業者の態度

JWDは当初、このオタネ浜に2000kW級の風力発電施設を18基、隣接する手稲山口団地の近くへ2基、合計20基を建設すると発表した。はじめ、事業者のやり口が分からない段階では、事業者“常識的な”対応を期待したり、主張や行動を“よく解釈”するような誤りもあった。要するに“甘かった”のである。しかし、風力発電問題に関わる全国組織に加盟して、そこからの情報が入るにつれて、また実際の事業者の発言や行動を知るにつれて「この連中とはまともな話し合いが通用しない」ということが分かってくる。「資料を出す」と約束しても何のかんのと理由をつけて出さない、「ボーリング調査は中止する」と約束してもコソソリと続ける、等等など枚挙に暇がない。一番の傑作は、手稲

区民センターで開かれた事業者の“説明会”で、“全くの第三者”を名乗る人物が、「私は事業者にも反対派にも関係ない」とわざわざ断って滔々と発言したが、翌日にはJWDの元社員であったことがバレて笑いものになったこと。わざわざ断らなければ調べもしないしバレなかったものを。でもこの人物はその後に開かれた小樽市での説明会に、厚顔にも臆面もなく今度は“有識者”の肩書で正面に座っていた。事業者のやることは万事この調子であった。

4. 私たちのやってきたこと

2011.3.11以降は特にその傾向は強いのだが、原発に対する忌避感が強い分だけ“再生可能エネルギー”に対する期待は大きい。中には“再生可能エネルギー”を積極的に推進する学者もいて(著名な学者で、よく新聞に登場する)風力発電のアセス上での問題点を指摘しただけなのに「それなら君は原発賛成なのか!」と気色ばんだりする。こうなると“学者”の定義も考えなくてはならない。

銭函海岸での風力発電の計画が持ち上がったとき、周りの小樽市民にそれとなく聞くと“風力発電賛成”が圧倒的に多かった。曰く「原発と違って無尽蔵のエネルギーを使える。しかもクリーン」「何もない荒地に風車を建てて発電できて固定資産税も入れば一石二鳥」。

そのような雰囲気の中で私たちのやらねばならないことは何か。私たちは次の6つの柱を立てた。

- ①我々自身が学習(勉強)すること。事業者やニセ学者のごまかしを見抜くためにも。
- ②あらゆる機会をとらえて宣伝(発信)すること。
- ③学習会や講演会など、小さなものでも軽視しないで取り組むこと。
- ④署名活動。この活動は初めから小樽・石狩・北海道の枠にこだわらず全国区の活動にする。
- ⑤行政や事業者“執拗に”要求を突き付ける。交渉を要求する。
- ⑥連帯を大切に。味方をたくさん作る。

これら柱は最初から明確になっていたものではない。今振り返ってみた時に「このあたりがポイントだったのかなア」と思っているのに過ぎないのかも知れない。その①～⑥を検証してみると、

①:「超低周波音は聞こえない。聞こえない音が身体に影響を及ぼすはずがない」。これがこの問題に対する“学問的な環境”を牛耳っている学会の主流。「眼に見えない。匂いもしない。耳にも聞こえない」放射線の害は万人が認めているのに“音”の世界ではまだこんな見解が幅を利かせている。

現地調査にも行った。道内では江差、寿都、石狩工業団地、道外では新潟県・胎内海岸、和歌山県・由良町など。

②:調べてみたら、全国の“風力問題メーリングリスト”での発信のほかに、日本科学者会議のシンポジウムや同総合学術集会(仙台)での発表、合同教育研究集会(2年)、風力発電問題を考える全国集会(2010.4.30 東京)、ふるさと海辺フォーラム(石狩)、日本生態学会のポスターセッション(札幌)など。また色々な団体が主催する集会・講演会などにも参加し、積極的にフロアから発言することを心掛けた。

記者会見も数回行ったが、宣伝不足のためかあまり来なかった。ただ個々の報道機関の方とは誠実に対応させていただいた。力になる、とてもよい記事を書いて下さった報道関係者の方もいる。

③:学習会では小樽でのシンポジウムのほか、声がかかれればプロジェクターを抱えてどこにでも行った。石狩、手稲金山、勤医協西区病院、手稲山口団地など。北大経済学部の某教室ゼミの合宿にも呼ばれて熱弁をふるったが、未だにどういう経路で声がかかったのかわからない。

北海道自然保護協会がこの運動に全面的に取り組んで下さった後は大きな講演会やシンポジウムな

ど、発言の場は量的にも多くなったし質的にも高いものになった。

④：署名活動は2010年11月より開始した。署名のあて先は国有地(海岸)使用の許認可権を持つ北海道知事とし、全国に呼びかけた。署名の到達数は2012年8月段階で7932筆。道庁交渉の際に提出。

⑤：考えられる関係のありそうな公的機関には交渉を要求し、また要請を行った。事業者をはじめ後志総合振興局用地管理室(旧土木現業所)、小樽市、札幌市、北海道(環境局・環境推進課、土木局・砂防災害課など)、北海道経済産業局、環境省北海道地方事務所など。交渉の回数は札幌市4回(次の5項で詳細を述べる)、北海道5回をはじめ記録に漏れて不明となったものも多い。

この交渉の中で事業者を除いて最も誠意のなかったのが前半部の小樽市であった。低周波音による全国の被害調査要求の拒否、担当者の横柄な態度、会談の拒否などひどい状態であったが、市長選挙に絡んで市の最高幹部が逮捕される事態の後、態度が改善された。

要請はことある毎に経産省、環境省、北海道、札幌市、石狩市、小樽市などの自治体に対して行った。この要請行動は北海道自然保護協会、石狩湾岸の風力発電を考える石狩市民の会、日本野鳥の会小樽支部、銭函海岸の自然を守る会の4者が共同して動くようになってから迫力を増した。

自治体ではないが、北海道環境影響審議会への要請行動も重視して行った。この件についても次の項で述べる。

⑥：署名運動の中で佐世保市宇久島、淡路島、和歌山県由良町、東・南伊豆町などの、風車で苦しんでいる人たちから連帯と支援を受けた。組織的には北海道自然保護協会の全面的な支援を受けたことが大きい。理論的・実践的に運動を強力に推し進める大きな力となった。

5. 足掛け6年の運動の到達点

足掛け6年に亘る運動の中でいろいろな成果を得てきたが、特に次の2点について述べたい。

①「風力発電施設に係る札幌市検証専門家会議」の結論及び札幌市との4回の交渉

手稲地区山口団地の住民の不安を受けて、という名目で、上記の検証専門家会議がつくられる。“音響=騒音・低周波音”と“景観”の専門家によるもので、生物・地質・歴史などの専門家は加わっていなかった。建設予定地が小樽市域であったためである。同会議はその中で騒音・低周波音の測定については現況値の測定に厳しい条件を要求したり、メーカーから音響パワー値の提出をさせたり、一定の積極的な役割を果たすが、風車稼働後の予測で超低周波音領域の音圧レベルが“感覚閾値”以下であることや、景観に大きな影響を及ぼさないことなどの理由で「おおむね妥当」の答申を出す。

事業者(JWD)はこの答申を最大限に利用し「札幌市からお墨付きをもらった」と主張した。私たち4者は共同で4回の札幌市との交渉を行い、札幌市の要求で「すべての内容で『おおむね妥当』と判断しているのではない」ことをJWDに認めさせ、低周波音に対する「おおむね妥当」を撤回させた。

②北海道環境影響審議会への要請と北海道知事意見、それを受けての環境省、経産省の意見

引き続き道の審議会では、傍聴を呼びかけ、道の事務方に各委員にあてた要請文の配布を要求した。審議会の答申を受けた知事意見、それを受けた環境省、経産省の厳しい意見が出され、銭函海岸の風力発電施設については“環境影響評価の準備書”の段階で止まっている。環境省の意見(2012.9.7)の中からいくつかを抜き書きする。本当は全文を載せたいのだが紙面の制約がある。

「評価の内容として不適切……例えば、調査の結果により個々の生物種への影響の可能性が示唆されているにも関わらず、全体としては『影響がない又は極めて小さい』と結論付けるなど、その根拠と

なるべき調査結果との間に乖離がある」「『心身に係る苦情に関する参照値(以下『参照値』という)』や感覚閾値との比較により評価を行っているが、参照値や感覚閾値は環境目標値として策定されたものではない。……現況からの増分等を用いて適切に評価を行うこと」「オオワシやオジロワシ……北海道内各地域において1・2月に出現頻度が最大……この時期の調査が行われていない……調査が不十分」その他、「国土面積の1.1%に満たない貴重な植生地域である『自然植生度10(自然草原)』……北海道自然環境保全指針においても『すぐれた自然』に指定され」などの記述もある。

6. 現在出されているアセス書の類の問題点と、銭函での経験をどう生かすのかということ

現在、北海道には“風力発電関連アセスのラッシュ”と呼ばれるほどの審議の申請が出されている。その内容は「(アセス関連の)書類の提供はしない。インターネットに載せた文書は印刷できないようにする」の縦覧方法の問題点から始まって、採用する風車の機種を明らかにしない、風車の関連データを示さない、音環境の現況値などは不当に高い数値を持ってくる、など内容もきわめてお粗末な(というより「意図的なあるいは犯罪的な」の方が正確かもしれない)ものとなっている。この傾向は2011.3.11の東京電力・福島事故以降、「自然再生エネルギーを期待する」国民の気持ちの波にワル乗りしているとしか思えない。

かつて“石油ショック”で国民が右往左往しているときに、「千載一遇のチャンス」と公言して懐を肥やした輩がいた。われわれ庶民ではない。風力発電を巡る構図も実はこの時の状況と同じである。今回、詳しく書くスペースがなかったために、風力発電の大きな負の側面としての“低周波音・超低周波音による健康被害”の問題や“バックアップ電源としての火力発電所の増設(つまりCO₂は減らない)”とか、等については省略した。その辺りの事情を知っている人でも「原発に比べれば、いろいろ問題はあっても風力発電の方が…」と考える人がいることは十分承知している。でも、善意のその人たちの期待を裏切って気の毒ではあるが、風力発電事業者の中には(市民ナントカを名乗る者を含めて)日本の未来のエネルギー問題を真剣に考えている業者は本当にいるのだろうか、と強い疑問を持つ。この人たち(つまりは事業者)の考えることは「いかに儲けるのか。そのためにはいかに住民をごまかすのか」だけではないのかと思う。その点では原発と大差はない。だから、「原子カムラ、アザ風力」なのだ、という主張が結構支持を広げている。

風力発電に限らず色々出されてくる問題は、基本的にはその地域の住民で関わなければならない。他人任せにはできない。この問題を考えるのに有効だと思う3つのキーワードを提案したい。①自分たち自身が賢くなること ②つくられた電気がどこで消費されるのかを知ること ③誰が得をするのかを知ること。

オオカミがキーストーン種であるということ

(一社) 日本オオカミ協会 理事 朝倉 裕

オオカミは、アメリカではイエローストーンのオオカミ再導入以来、頭数が増えてきたため、絶対に保護すべき動物から一つ格下げされて、狩猟の対象動物になったが、これに反対する人たちも多い。オオカミを保護しようという集会では【The wolf is excellent!】【オオカミは特別なんだ!】というプラカードを掲げている人も見かける。

なぜオオカミが特別なのだろうか。

その理由は、「オオカミはキーストーン種だから」なのだ。

「キーストーン」と他の動物と違う役割を担う動物である。数は少なくとも、その動物がいなくなると、生態系全部が壊れてしまうような動物のことを指す。その生態系には不可欠の動物だ。

キーストーン種を失って「生態系全部が壊れる」ことを、ウィリアム・ソウルゼンバーグというジャーナリストは「捕食者なき世界」(文芸春秋)という著書の中で、「メルトダウン」と表現した。

たとえばオオカミがいなくなれば、シカはどんどん増えて植物を食べ続ける。草花がなくなれば蝶や蜂も花がないから棲めなくなるし、樹の葉を食べる虫や鳥もいなくなる。草木がなくなってしまうと落ち葉が土に戻ることもなくなって土壌はやせてくる。連鎖的に生態系全部が壊れていくことになる。ソウルゼンバーグはそうした森の状況を、「爆弾が落ちたような」とも表現した。

そのような状態になったとき、シカ自身も食べるものを失ってしまう。そして、島のような限られた地域では、一斉に餓死することがある。アメリカではスペリオール湖の中の島、ロイヤル島でその例があるし、日本でも金華山島(宮城県)で同様の例が観察されている。

その生態系にオオカミが戻ってくると、シカが捕食されて増え続けることがなくなる。年をとったシカや病気のシカがまず食べられるから、シカの群れは健康な個体だけが残り、強い遺伝子が残ることになる。しかも季節によって狩の対象を変える。春から秋はまだ小さな生まれたばかりの幼獣、冬は春に近くなるほど繁殖で疲れた立派な角を持ったオス、季節にかかわりなく年取った個体、病気やケガをしたメスも捕食される。幼獣を獲ることで頭数を減らし、弱った個体を捕食するのは、シカの群れの健康管理にもなるということになる。

オオカミがシカのような大きな草食獣を食べ、シカを追い掛け回し、一ヶ所に居つくことをさせないため、植物が多様性を保っていられる。すると昆虫も鳥も棲みかをその草木の中に作れて、柔らかい葉や花の蜜を食べることができる。その昆虫に媒介してもらって花粉を広げて樹木も拡大できる。樹木は葉を落として土の材料になり、土壌の生き物が繁殖して微生物も増えるというわけだ。クマもオオカミの恩恵を蒙る。オオカミが戻ってきたら植生が回復して好物のベリーが増え、クマのエサが増えたという研究があった。メルトダウンとは逆に、連鎖的に好循環が始まるのだ。

アメリカでは、動物相や植物相の相互関係の研究が進んだため、それがよくわかるようになった。オオカミの研究も、1995年にイエローストーンにオオカミを再導入してからぐんと進んだ。オオカミは人間を避ける頭のいい動物で、欧米人は、オオカミのことは童話などでよく知っていると思い込んでいたから、本格的な科学的な研究は、1944年に発表されたムーリーという研究者のアラスカでの研究が初めてだった。イエローストーン国立公園は、広い草原地形で遠く離れていても観察しやすいし、国のプロジェクトだから飛行機を使った観察も頻繁にできるようになったので、新しい研究が次々に出てくるようになった。その結果、オオカミは生態系に不可欠の「キーストーン捕食者」という役割を担う動物だということがはっきりとわかってきた。

日本にもシカが増えすぎて森がなくなっているところがある。それどころか、どんどん増え続けている。本州の山はどこに行っても「爆弾が落ちたような」森が目につく。日本は緑豊かな土地なんだという先入観があり、登山者も緑の質が変化していることに気づかない。シカが増えすぎた山野の植物

の変化は加速している。「メルトダウン」が始まっている。

日本の自然にもオオカミが必要なのだ。

「日本にオオカミを入れて増えすぎたらどうするんだ。日本は狭くて人里と山が近いんだよ。」と言われるかもしれない。だけど、日本は本当に狭いのだろうか。山に登る人たちなら、山頂から眺める日本の山や森が、広いことをご存知のはずだ。本州だったら八ヶ岳の山頂から眺める南アルプスにかけての森は十分に広く、その中に2万頭か3万頭のシカが森に隠れている。南アルプスの空撮写真を検索してみれば、全域を写した画像が見つかる。そこに10万頭のシカがいるのだと思えば、同じ場所に100頭のオオカミが棲めるといっても何の不思議もない。

「オオカミが10万頭になってシカを食べつくしちゃうようなことはない?」

と疑問に思うかもしれない。ところがそんな話は世界中探してもない。

オオカミについての大きな誤解がここにもある。オオカミの群れはごろつきの集まりではなく、家族なのだ。お父さんがいてお母さんがいて、赤ん坊がいて、まだ狩も満足にできない子どもがいる、両親と1年目2年目の子どもという家族構成なのだ。一家で3万ヘクタールの敷地を毎日50キロも走り回って守っている。そこにエサを食べつくしては家族は存続できないのだ。エサが少なくなってくると、エサを探さ敷地を広げようとする。隣のオオカミもナワバリを広げてくる。隣とは犬猿の仲どころではなく、敵のようなものだから、普段は敷地の間には2キロくらいの緩衝地帯を作っているが、エサが少なくなってくると仕方なく広げていく。隣のナワバリとぶつかれば、家族でない同族は敵同士だから、どちらかが何頭か死ぬまで闘うことになる。それがオオカミの死因の一番多い理由だ。また、オオカミの狩の成功率は高くないから、エサの密度が低くなってくるとエサにありつく間隔が長くなっていく。大人は飢えに強いが、子どもは飢えに弱く死んでしまう。それが死因の2番目の理由だ。だから、エサを減らしていくと自分たちも減ってしまうことになる。大型の肉食獣ははっきりしたナワバリをもって、同種の他の群れに譲らないというのは、そうした理由がある。草食獣とは違い、オオカミは自分たちで絶妙のバランスをとる。

草食獣は元々捕食者に食べられることを前提にした繁殖の戦略をもっている。ニホンジカやエゾシカは、捕食者がいなければ年に20%の勢いで増えていく。それでいてエサがなくなってくると、体のサイズを小さくして少ないエサを分配しても頭数は減らないようにする。だから増加率は減らない。シカも捕食者を待っているのである。

「The wolf is essential! オオカミは不可欠だ!」

私たち日本オオカミ協会は、日本はオオカミを再導入する必要があると考えている。オオカミが人間を襲うというモンスターのようイメージは、明治維新以来欧米から入ってきた西洋文化の刷り込みであり、オオカミという動物の研究が増えれば増えるほど、人間とオオカミの軋轢の物語は冤罪だということが理解されてきている。

まず偏見なしに、アメリカやヨーロッパにある材料を検討し、正確な情報を元に議論することが必要である。

「大間原子力発電所建設・稼働反対」の要望書

～各政党に手交並びに送付～

北海道自然保護協会 会長 乳井幸教

I 送付に当たって

一昨年10月大間原発工事が再開と同時に函館市や当協会を始め諸団体が工事差し止めあるいは工事反対・脱原発を要求してきたが、現政権に変わっても何の進展もないのが現状である。特に、北海道8区（渡島・桧山地区）で立候補した全ての議員及び政党は大間原発反対を選挙公約として掲げていたはずである。

今や都知事選挙も絡みどの政党がどんな原発政策を推し進めとしているのか支離滅裂と言わざるを得ない。当協会ではこうした現況を踏まえ現在国会に議席を持つすべての政党に対し、「大間原発反対の要望書」とこれに対する「回答依頼書」を昨年12月16日送付した。ここにその全文を掲載する。

II 要望書全文

1 鏡文

大間原子力発電所建設反対の要望について

このことについて、別紙により強く要望致しますのでよろしくお取り計らい願います。

記

要望書

- (1) 大間原子力発電所建設・稼働の反対声明文1通
- (2) 上記反対の事由書（箇条書き）1通（2部）
- (3) 標記「大間原子力発電所建設・稼働の反対」に対する貴政党の見方・考え方等ご返答の依頼文1通

2 要望書

(1) 反対声明文

私ども北海道自然保護協会は総会と数度に亘る「学習会」「理事会」を開き標記の「大間原子力発電所建設・稼働」について論議し、検討してまいりましたが、函館市を始め道南各地に及ぼす大きな危険や事故時のリスクが大きく、自然保護という人類生存の基盤を護るという立場から到底認められないという結論に達しました。

ここに改めて「大間原子力発電所建設・稼働」に反対を表明する次第です。

貴政党におかれましても今一度、事の重大さに鑑み良く検討されて将来に悔いを残さないよう私どもとともに建設反対を推し進めることを強く要望致します。

(2) 建設に反対する事由

①ご存知の通り、原子力発電所を建設する位置は本州の最北端の町で、青森県庁所在地の青森市とは80キロメートル離れていますが、北海道の30万中核都市である函館市からは、最短の汐首岬まで23キロメートル、また、事故発生時の避難地域である50キロメートル内には函館市を始め北斗市・七飯町など2市6町村が含まれ、およそ37万人が居住し生活しています。

②須火山帯の中央部にあり、何時火山の被害を被るか予測が付きません。

また、この下北半島の太平洋側には80～100キロメートルにも及ぶ活断層があることも推測されていますが、未だ本格的な調査が行われていない地盤の非常に危険で不安定な地質の上にあるといえます。

③ また、仮に事故が無く、順調に稼働したとしても、後述しますがフルMOX燃料を利用し、核分裂反応促進させるため水の代わりに液化ナトリウムを冷却剤として使用しなければなりません。そのため常温では固体のナトリウムを液体状態に保つには建屋内を常時摂氏200度以上におかなければならないという世界で初めての原子炉なのです。このため、液体ナトリウムの漏出や排水による海水温度の上昇などこの影響はこの土地の住民にとって重大なことなのです。

④ この近くの産業は、水産業が主体です。ちょうど津軽海峡の潮流の出入口になり、その流れと太平洋の日本海岸を流れる親潮（千島寒流）と黒潮（日本暖流）の合流点にあたり各種魚介類の集まる大漁業地域になっています。特産物として大間マグロ、戸井マグロ、ガゴメ昆布、椴法華の根ボッケ、尾札部の白口浜昆布等々枚挙に暇はありません。水産物への影響は計り知れません。

⑤ 元々、このフルMOX燃料を用いて発電所を造るという発想は全国の原子力発電所で核分裂の力が衰えたウラン138に余剰のプルトニウムを混合させ核分裂の活性化を図り、永久の原子力発電を夢見るプルサーマル計画の一貫として計画されたものなのですが、実験炉「もんじゅ」ではナトリウム流出事故が起こり、各国で試験炉を造って実用化を図ろうとしたものの、ウランとプルトニウムの混合割合や核分裂の速さや強さをコントロールする冷却温度等難問を抱えて挫折・頓挫し、今では世界中の実験炉が稼働を控えている代物です。もちろん日本でも「もんじゅ」さえ稼働を控えています。再開の目処は立っていません。それでも1日5000万円をかけて冷却し続けなければならない状況が続いているのです。

⑥ このように全国の使用済み核燃料を下北半島の一角に集め、六ヶ所村に再処理工場、そこで取り出されたプルトニウムを使用済ウランと混合させ大間原発で原子力発電に利用する。その後むつ市に使用済核燃料の貯蔵施設を設け、最後に最終処分場へ埋設するという計画だったのです。

ところが、計画から十数年経った今も最終処分場の県も市町村も、ましてや処分方法さえ決まっていないのが現状です。加えて六ヶ所村にできた再処理工場もトラブル続きで原因も究明できないまま稼働中止の状態です。ただただ使用済核燃料が下北半島に持ち込まれるだけで現状の貯蔵量は98%に達しました。

⑦ こんな慌ただしい状態の中で、今まで原子力発電所などを造ったこともない電源開発という元水力発電会社・送電工事が専門の会社が本当に安全で安心の保証できる原子力発電所を造ることができるのでしょうか。まだまだ先にやるべきことがあるのではないのでしょうか。最終処分地と処分方法の決定、再生エネルギーの可能性や試作等々もっと研究を積み重ねた上で原子力規制委員会への申請を話題に載せても決して遅くはないと思います。

(4) 結語

- ① いずれにしても、函館市をはじめこの道南地方は歴史的にも重要な遺産や文化財を有しており、特にバリー来航以来、我が国の重要寄港地として世界の注視を浴びてきている地域です。
- ② 函館市をはじめ道南に住む住民の命と健康、そして安全で安心して住まえる自然環境の保護・保全を確実に子々孫々まで保証できる施策を十分検討・論議し合い後世に悔いを残さない方途を見い出して決定していくことを要望し結語とします。

「編集後記」

インターネットが普及し、紙媒体での広報活動を少し休んでいましたがやはり機関誌をじっくり読むには紙が一番良いようです。今号は今までの自然保護活動のテーマとは一味違った内容としました。私自信日本オオカミ協会の会員なのですが、今まで思い違いをしていた部分を反省しています。それは鹿の害を防ぐため天敵であるオオカミの導入と考えていましたが、キーストーンという言葉に出会ってこれが無いと自然のバランスが崩壊してしまうことです。アメリカが1995年にカナダから導入し、ドイツが2000年にオオカミを導入しました。そういう面では日本が一番遅れています。

最大の環境破壊である原発事故を受けて脱原発のための再生可能エネルギーにも大変な問題を抱えています。今号がその問題を考えるきっかけになればと思っています。

北の自然 NO.88

2014年9月25日発行 北海道自然保護連合 発行人 共同代表 安藤御史、
関口隆嗣、藤井純一 札幌市東区北8条東17丁目1-7 反橋一夫方

Tel/f a x 011-702-4548 郵便振替 02710-5-4071

※7月に大阪の賛助会員西田英子さんの遺言により100万円の寄贈がありました。皆様にお伝えするとともにご遺志に報いるためにも頑張ります。



(全日本登山とスキー用品専門店協会会員)
登山とアウトドア専門店

秀岳荘

(本店) 〒001-0012 札幌市北区北12条西3丁目
TEL011(726)1235
営業時間 AM10:00~PM7:00 ●月曜定休

(白石店) 〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2
TEL011(860)1111
営業時間 AM10:30~PM7:30 ●水曜定休

(旭川店) 〒070-8045 旭川市忠和5条4丁目
TEL0166(61)1930
営業時間 AM10:00~PM7:00 ●月曜定休

<http://www.shugakuso.co.jp>